

# 就職活動を通じた地元志向の変化

平尾 元彦

田中久美子

## 要旨

地元志向は、就職活動を通じて容易に変化する。就職活動前の地元志向と、結果としての地元就職は、出現率でみる限り大きな違いはない。非地元志向者が地元で就職したり、地元志向者が地元を離れたたり、両方の動きが観察される。出会いによる視野拡大や、親の影響などが変化の要因と考えられる。就職活動中の学生は、必ずしも地元の会社だけを見ているわけではない。地元志向にとらわれることなく、幅広い視野で仕事選択の機会を提供することが重要である。それは結果として、地元就職を減少させるものではない。

## キーワード

地元志向 地元就職 就職活動 キャリア教育

### 1. 研究の目的

大学生の地元志向は、地域を支える人材の獲得だとする好意的な見方もあれば、地元にとどまるという小さな価値観を持つべきではないなどの否定的な見方もある。地元志向は個人の価値観ではあるが、日本社会において、とりわけ人口減に直面する地域社会にとって、気になる現象であることは間違いない。

地元志向に関するこれまでの研究には、杉山(2012)や米原・田中(2015)などがある。志向はあくまでも心の表明であって、意識の問題である。両研究を含めこれまでの研究の多くは就職活動前の意識を把握するもので、結果としての地元選択を議論するものではない。

一方で、どこに就職するかは就職活動の結果である。地元を志向していたとしても、結果的に地元外に出て行く学生は少なくない。もちろん、就職先は場所だけで決めるものではなく、仕事のやりがいや待遇、職場の雰囲気や会社の方針も重要な判断材料となるだろう。大学生の

就職先決定因に関する研究には、安田(1999)や永野(2004)などがある。このほか、ディスコ(2015)、ダイヤモンドヒューマンリソース(2015)に代表される就職情報会社による経年調査が多数存在する。就職活動を終えた大学生の選社理由は「社会貢献度が高い」「職場の雰囲気が良い」などが主であることをレポートするが、これらは全国調査に基づくもので、地域の視点を有するものではない。

地元就職に焦点をあてた調査報告に、就職みらい研究所(2015)がある。就職活動を終えた全国の大学生に、地元で働きたい理由を尋ねることで、地方で就職する若者の選択要因を明らかにする。ここでは、地元への愛着や、地元を離れることへの不安が影響していることがわかる。また、松坂(2014)は、就職活動を終えた4年生へのインタビュー調査を通じて、「家族の意見や意向を重視」、「環境変化への抵抗」の2点を地元選択の学生の特徴にあげる。

地元志向であっても地元で就職しない学生、逆に、地元志向でなくても地元で就職する学生

もあらわれる。地元がいいと思っていた学生が、就職活動中に会った大企業のビジネスパーソンに憧れることもあれば、東京に出たいと思っていた学生が、地元の中小企業の経営者と意気投合して地元を選ぶ話も聞く。初期段階で学生が言っていたことと就職活動の結果が異なることは、就職支援の現場ではよく目にする光景だろう。

これまでの研究には、就職活動前の意識（つまり志向）に関する研究と、就職活動の結果（つまり行動）に関する研究が、それぞれに存在する<sup>1)</sup>。本研究はこの両者をつなぐものであり、地域の視点を持って、地元志向の変化量の計測と要因の抽出を試みる。山口大学3年生へのアンケート調査および卒業生の就職状況調査のデータを援用しながら分析を進め、「地元志向の移ろい」の実態を明らかにする。

## 2. 地元就職と地元志向の実態

地元志向の実態を把握するために、山口大学

3年生を対象にアンケート調査を行った。2015年7月に実施した793人への意識調査である。「大学を卒業してすぐの、あるいは大学院を修了した後の就職先地域について、今のあなたの考えに最も近いもの一つに○をつけてください」との質問で地元志向をさぐった<sup>2)</sup>。

ここでは地方圏の学生の実態であることを明確にするために、中四国・九州出身者に限定して分析を進める。対象703人中、おおむね出身県内を想定する地元志向（狭）は36.4%、中国地方や九州地方など地域ブロックを想定した地元志向（広）は29.4%、あわせて65.9%が広い意味での地元志向である。地元志向は3分の2ほど存在し、文系学生の方がやや高い傾向は見られる。

一方、就職活動の結果としての就職先を、2015年3月卒業生の実態から見る<sup>3)</sup>。上記の地元志向調査とは、学年が異なることに注意が必要である。同じ人物の追跡調査ではないし、対象範囲も異なるために厳密な意味での比較はできないが、両者の比較のなかから、就職活動前後の傾向をとらえたい。

表1 地元志向率と地元就職率

単位：%

	地元(狭)		地元(広)		地元(合計)	
	地元志向率	地元就職率	地元志向率	地元就職率	地元志向率	地元就職率
文系(学部)	37.0	55.2	30.2	21.6	67.2	76.8
文系(大学院)		64.7		16.7		81.4
理系(学部)	35.2	42.3	28.0	30.2	63.1	72.4
理系(大学院)		18.4		16.7		35.2
合計	36.4	42.3	29.4	22.8	65.9	65.1

- 注) 1. 学部の文系は、人文・教育・経済学部の合計、理系は、理・医・工・農学部の合計である。大学院の文系は、人文科学・教育学・経済学の各研究科の合計。理系は、理工学・医学系・農学の各研究科（修士・博士前期）の合計である。社会人学生を除く集計のため技術経営研究科には該当者がいない。
2. 地元志向率の調査は、人文・教育・経済・理学・農学部の学生に実施をした結果であり、地元就職率とは対象範囲が異なる。教育学部は教員免許取得予定者以外のクラスで実施をしたため、同学部の学生の一部である。
3. 地元就職率に、医学部医学科・農学部獣医学科を含まない。
4. 中四国・九州出身者のみ集計している。地元（狭）は出身県内、地元（広）は中四国・九州地域内を指す。ただし、地元志向率の地元（狭）には、通勤可能な県外を含む。

山口大学の卒業生（学部・修士）2319人のうち、進学者などを除き、就職者は1570人であった。うち地方圏（中四国・九州）出身者は1363人で86.8%を占める。この学生たちの就職先を見ると、出身県内就職率は42.3%、範囲を中四国・九州に拡大した地方圏就職率は65.1%であった。結果的に県内就職率は、県内志向率より若干高く、地方ブロックで見ると地元志向率と地元就職率は、ほぼ等しいことがわかる<sup>4)</sup>。

中四国・九州という地方圏で見ると、地元志向の学生と同じくらいの人数が、結果的に地元就職している実態が読みとれる。地元志向がありながらも地方では雇用がないのでやむなく大都市圏へ流出しているという実態も、地元志向でない学生の多くが地元就職しているという実態も、ここではなさそうだ。

### 3 就職活動を通じた意識の変化

#### 3.1 地元志向の変化量

就職活動を終えた4年生・大学院2年生にアンケート調査を行った。2015年10～11月に、質問紙、および、Webアンケートの2つの手法を併用した。回答は171人。うち中四国・九州以外の出身者を除いた対象学生160人で、以下、分析を行う。

この調査における就職活動前の地元志向率は、地元（狭）が38.1%、地元（広）が32.5%、あわせて70.6%である<sup>5)</sup>。表1に示す3年生調査では65.9%であったので、それよりは高いが大きく異なる数値というわけではない。

結果的に地元（狭）に就職した学生は76人で全体の47.5%、地元（広）は49人で全体の30.6%、あわせて78.1%が地元就職している。卒業時の最終結果である就職状況調査の65.1%に比べると10ポイント以上高い値を示した。アンケートの回答が学部生中心であったことが影響しているとみられる。

地元志向の状況別の地元就職率を表2に示す。ほぼ県内を指す地元志向（狭）の学生61人のうち12人（19.7%）は県外で就職し、広い意味での地元志向（狭+広）の学生103人のうち、11人（10.7%）が非地元へ就職している。逆に、非地元志向の学生47人のうち、希望どおりに非地元（中四国・九州外）に就職したのは24人（51.1%）にとどまる。ここには「東京・大阪・名古屋など大都市圏に就職したい」だけでなく、「地域はどこでもよい」を含むからなのかもしれない。非地元志向の半数近くは、結果的に地元を選択していることになる。

表2 就職活動前後の地元志向と地元就職

地元(狭) 61	→	地元(狭)	49 (80.3%)
		→ 地元(広)	9 (14.8%)
		→ 非地元	3 (4.9%)
地元(広) 52	→	地元(狭)	18 (34.6%)
		→ 地元(広)	26 (50.0%)
		→ 非地元	8 (15.4%)
非地元 47	→	地元(狭)	9 (19.1%)
		→ 地元(広)	14 (29.8%)
		→ 非地元	24 (51.1%)

非地元志向の学生のなかで、広い地元就職する割合は29.8%であり、狭い地元（19.1%）を上回る。どこでもいいと言っていた学生が就職活動に取り組むなかで、福岡や広島など地方中枢都市の会社に就職するケースはよくある。サービス経済化が進む中でこれらの都市が大卒者の受け皿となっている面はあるだろう。ここに地方圏におけるダム効果を見ることができる<sup>6)</sup>。

#### 3.2 地元志向変化の要因

就職活動前の希望地域と、就職先の地域が異なる回答者に、その事実をどのように受けとめているかを質問したところ、62人から回答が

得られた。もともと強くこだわっていたわけではないとの回答は 45.2%である。半数弱の学生は、当初から移ろいやすいタイプだったのかもしれない。就職活動の途中で地域にこだわらなくなった者は 12.9%，逆にこだわるようになった者が 17.7%で、両方の気持ちの変化が見られる。

就職活動を通じて地元志向に変化が訪れた者のなかに、魅力的な仕事・会社にめぐりあったとする者が 21.0%いる。出会いが地域志向を変える可能性を示している。地元がよかったが決まらなかったとする者は 16.1%。地域外を含めて活動していたのだろう。広域的に動いている実態が読みとれる。

実際、就職活動中に他の地域の企業・官公庁等に接触したかという質問には、半数以上の学生に接触経験が見られた。地元志向を表明する学生 113 人のうち、大学が開催する学内業界・企業研究会や、各地で開催される合同説明会で地域外の会社等へ接触した学生は 61.1%，単独の説明会や採用試験を受けた学生は 61.9%であった。地元のみは約 4 割で、6 割は域外との出会いを持っている（表 4）。地元志向であっても、地元しか見ていないわけではない。

表 5 は、当初の志望と就職先が異なる学生に対して、その理由を尋ねた結果を、就職先地域の志向変化別にまとめたものである。自由記載

表 3 就職活動前の希望地域と活動後の就職先が異なる理由

単位：%	
1. もともと地域に強くこだわっていたわけではなかった	45.2
2. できれば地域にこだわりたいが、決まらなかったのでは仕方ない	16.1
3. 魅力的な仕事・会社にめぐりあえたので、地域は気にならない	21.0
4. 就職活動の途中で考え方が変わって、地域にこだわらなくなった	12.9
5. 就職活動の途中で考え方が変わって、地域にこだわるようになった	17.7

表 4 地域“外”の会社等への接触

単位：%			
	かなりした	少しした	まったくしていない
学内セミナー・合同説明会	15.0	46.0	38.9
単独説明会・採用試験	15.9	46.0	38.1

欄の回答のなかから、地元志向の移ろいの要因を以下の点にまとめる。

#### ① やりがい志向

就職活動を通して“仕事に目覚める”学生たちがいる。家族のことを考えて地元だと思っていた学生が、やりたい仕事地域外にあることに気づいて方向転換する例などである。逆に、外に出たいと思っていた者が、地元の仕事のやりがいに目覚めるケースもある。

仕事を知らない若者が、仕事を知り自身の道を考える。就職活動はその思考を深める活動とも言えるだろう。やりがいのある仕事はどの地域にも存在する。地元に近い方向にも離れる方向にも、どちらにも変化の力は働く。

#### ② 地元への愛着

地元へ貢献する想いを抱いたことや、どこにもある仕事であれば地元の人に役立ちたいと思ったなど、地元への愛着を変化の理由にあげる学生がいる。就職活動を通して「地域へのこだわりが強くなった」、「やはり自分にはこの地が合っている」との声も報告される。

反面、最初は地元と思っていたものの、就職活動をするなかで「地元での就職に対してあまり執着がない」ことに気づいたとの声もあった。また、都市圏での経験を地元に戻元する気持ちが芽生え、いったん地元を離れることを決めた学生もいる。就職活動を通じて、地元への様々な想いを抱く。ここにも地元を選ぶ方向と選ばない方向のどちらの力も働いている。

表5 地元志向と就職先地域の変化の理由ときっかけ

	地元（広）へ	非地元へ
地元（狭）から	<p>10. 面接などを通じて、今後、私は社会人になるんだと認識した。</p> <p>22. 出身県での勤務を強く希望していたが、就職先企業を選ぶ軸として安定性と福利厚生を重視することとしたため、本社が出身県であれば勤務先に関してはこだわらなくなった。</p> <p>63. 仕事内容や転勤などのことを実際に職員の方から聞いて、そこまで地域へのこだわりが少なくなった。</p> <p>142. 就職活動前は、両親の意向を優先して地元での就職を考えていましたが、両親の意見を除いて将来を考えてみたときに、私は地元での就職に対してあまり執着がないことに気が付き、本当にやりたい仕事は何か、を中心に考えるようになりました。</p> <p>154. 学内のイベントに参加したときに、他の人の質疑応答を聞いて「本当に地元に戻りたいのか」や「なぜ戻りたいのか」を深く考えるようになった。このことがきっかけで「地元でなくてもよいかも」と考えるようになり、出身県外で働くことも考えるようになった。</p>	<p>92. 就職活動初期の段階では、地元に戻って両親の近くで働こうと考えていました。就職活動をしていく中で地域を絞ることは仕事の選択肢をも絞ってしまうことに気が付いたので、最終的には地域を絞らず活動をし、地元外での就職になりました。両親たちだけで生活していくのが不自由になったら自分の家の近所へ引っ越してきてもらい、支えたいと思います。</p> <p>155. 変わりました。始めは、一人っ子という事もあり県内にとどまると考えていましたが、県内にあまり私の興味のある仕事で魅力的な会社が見つかりませんでした。そこで、県外に目を向けると魅力的な会社が多く見つかったのですが、全国転勤の会社がほとんど。そこで、やはり人生の選択なので、自分のやりたい仕事につきたいと強く思うようになり、重視する点が変わったからです。</p>
	地元（狭）へ	非地元へ
地元（広）から	<p>87. 地域へのこだわりが強くなったと思います。きっかけは説明会です。国家公務員の説明会において、地方公務員と国家公務員の違いを意識するようになり、出身県にさまざまな形や視点で直接貢献できる点に地方公務員の魅力を感じたからです。</p> <p>117. 地元県外でもいいと思っていたが、やはり地元に戻りたいと思った。地元の企業を回り、話を聞いたりしているとやはり自分にはこの地が合っているととても感じたから。</p> <p>120. 親の考えと結婚などを考えて変わった。</p> <p>159. 就活を通して家族のことや自分の将来のことをより具体的にイメージできるようになり、「自分のやりたいこと」と「地域」を両方実現できるところへの志望度が高まりました。</p>	<p>9. 変わった。自分の求めるものは、もともと希望していた地域内で叶えるには難しかったから</p> <p>156. 業界やしたいことがだんだん明確になり、あまり関係なくなった。ただもともと地元で働きたいと考えていたため、内定をいただいた時は地元（少し興味あるもの）又は全国（興味あるもの）ですごく迷う事もあった。内定を頂いた順番も大きくかかわると思う。</p> <p>165. 就活の終盤になると、やりたいこと、なりたい自分、働く環境をイメージして考えてみた結果、勤務地にこだわる必要がない。優先順位が低いことに気づきました。ただ、最終的に都市圏で経験を積んで地方に還元する気持ちもあります。</p> <p>167. いつか希望の地域に帰ろうと思う。若いうちは都会に出て、自分を磨きます。</p>
	地元（狭）へ	地元（広）へ
非地元から	<p>3. 最初はメガバンクを志望して、面接もかなり進んでいたが、地元の地銀から内定を貰い、その事を家族に話すともうすごく喜んでくれたため、一気に心変わりしてしまいました。メガバンクは辞退し、地銀に就職を決めました。</p> <p>160. MRになりたくて就職活動をしていくなかで、説明会などで患者さんを救うことができた実際のエピソードを聞いていると、せっかく患者さんを救うなら、今までお世話になった地元の方がいい、恩返しをしたいという想いが強くなり、地元で働ける企業を探すようになりました。</p> <p>169. 全国どこで働いてもよかったが、就職活動をするにあたって、市役所での仕事やその市役所のある地域に魅力を感じ、その地域で働きたいと思った。</p>	<p>59. 初めから地域にこだわりはなかった為、特に考えに変化はありませんでした。</p> <p>164. 行きたい会社がたまたま近隣県だったのですが、いざ内定をもらおうと近隣県に本社があるというのは、親も安心であるし、よかったと考えている。</p>

注) 1. 就職活動前の希望地域と就職先地域が異なる回答者へ、変わった理由ときっかけを尋ねたもの。  
 2. 表の数字は、アンケート整理番号。  
 3. アンケート調査の自由記入欄の記載原文どおり。ただし、個人や地域が特定されないよう、一部に表現を変更したところがある。

### ③ 親の意向

表5に示す全20意見のなかで7つ意見には“親”など家族にかかわる言葉が登場する。就職活動を通して、家族のことを考えるようになって地元を選んだ学生もいれば、地元で内定を得たことを喜ぶ家族を見て地元を決めたとする声もある。とりわけ非地元志向の学生が地元就職に転換するとき、親の影響が大きいことがわかる。

## 4. 結論

本研究は、就職活動前の地元志向と、結果としての就職先地域を比較することで、就職活動を通じた学生の意識変化をさぐってきた。ここでわかったことは、事前の地元志向率と事後の就職率には、大きな差はないということである。地元で就職したいと思った学生と同じくらいの人数が、結果的には地元で就職しているという事実である。

では、地元を志向した学生がそのまま地元で就職しているかという点、そうでもない実態がある。就職活動を終えた学生への振り返りアンケート調査によると、県内だと約2割、地方圏まで拡大すると約1割の地元志向者は、結果的に自分が志向していた地域の外に出ている。一方、「東京・大阪・名古屋など大都市圏に出たい」、および、「どこでもいい」学生の約半数は、結果的に地元で就職していたという実態が明らかになった。地元志向は「移ろいやすい」とみることができる。

地元志向の変化には、「仕事のやりがい」や「地元への愛着」が、活動を通じて変化することが要因となっている。変化というよりは深化と言った方がよいのかもしれない。自己分析や業界・企業研究を通じて視野を広げ、これまで気づかなかった自分に気づく機会を得ている。若者のキャリア発達の観点から、また、職場への定着の観点から、この深化は望ましいと言え

るだろう。

学生たちは就職活動を通じて多くの企業と出会い、様々な社会人と出会う。たとえ地元志向であったとしても地元の会社とだけ会っているわけではない。数多くの出会いを通じて卒業後の道を選んでいくもので、出会いは学び成長するチャンスでもある。正課内外のキャリア教育のなかで、積極的に機会をつくっていく必要があるだろう。

学生たちの変化の要因を見ていくと、移ろいは両方向に働くことが見てとれる。仕事の魅力はどちらにもあるし、地元への愛着は、一見、地元就職を増やす方向に働くと思われがちだが、愛着があるからこそ外に出る選択もありえる。親の意向は、非地元志向を地元就職へと導く誘因となる。一方、この調査では明示されなかったが、当初は地元で就職したいと言っていた学生が外に出る意思決定には、親の容認が背後にあると推察される。

就職活動を通じて両方のベクトルが働き、結果的に同じくらいの移ろいが観察される。地方の学生たちに幅広い選択肢を与えることは人材流出につながるのではないかと懸念があるのかもしれない。しかしながら本研究は、このことが必ずしも地元就職を減少させるものではないことを示唆している。

(山口大学学生支援センター 教授)

(島根大学キャリアセンター 講師)

### 【注】

- 1) 山本・長光(2015)や稲田・田澤(2009)、佐藤ほか(2010)は、就職活動前後および途中の意識と行動の変化を分析する数少ない研究であるが、これらは地域の視点を持つものではない。
- 2) 山口大学の3年生対象共通教育科目受講者に質問紙を配布し、意識を把握した。人文・教育・経済・理学・農学部を対象とした必修科目である(ただし教育学部の教員免許

- 取得希望者は含まれない)。3年生の7月時点で就職先(地域)の希望を,①実家から通える範囲,②出身県内,③近隣県を含めた地方圏(九州や中国地方など),④東京・大阪・名古屋など大都市圏,⑤地域はどこでもよい,⑥その他,以上6項目からひとつを選択させ,①②を地元志向(狭),③を地元志向(広),④⑤を非地元志向とした。⑥を回答した者はいなかった。
- 3) 卒業時の就職状況調査データで,2014年度卒業生の卒業後の進路の最終結果である。出身地は,出身高校所在地を基本とする。就職先は,本社所在地を基本とするが,勤務先が明らかな者については勤務地を就職先とする。
- 4) 文系大学院生の地元就職率が高いのは,出身地で学校教員として就職する学生が多く含まれるため。理系大学院生の地元就職率が低いのは,大手メーカーなど全国的な会社への就職者が多いためとみられる。
- 5) 地元の定義は,注2の地元志向調査と同様である。
- 6) ダム効果とは,東京一極集中の流れのなか,1980~90年代に急速に都市化が進展した札幌や福岡などの中枢都市が受け皿となって地方圏からの人口流出を抑える現象。九州経済調査協会(1991)などに詳しい。

#### 【参考文献】

- 稲田恵・田澤実,2009,「就職活動を行う大学生の希望進路の変化と内定先の満足度の関連—キャリア「RE」デザインの観点から—,生涯学習とキャリアデザイン,6,99-130
- 佐藤一磨・梅崎修・上西充子・中野貴之,2010,「志望業界の変化は大学生の就職活動にどのような影響を及ぼすのか—卒業時アンケート調査の分析—,キャリアデザイン研究,6,83-99
- 杉山成,2012,「大学生における地元志向意識とキャリア」,小樽商科大学人文研究,123,

123-140

- 永野仁,2004,「大学生の就職活動とその成功の条件」,永野仁編著『大学生の就職と採用—学生1,143名,企業658社,若手社員211名,244大学の実証分析』,第4章,91-114,中央経済社
- 松坂暢浩,2014,「大学生の地元志向に関する研究—地元就職決定者のインタビュー調査から見られる地元志向について—」,日本キャリアデザイン学会第11回大会,口頭発表
- 安田雪,1999,『大学生の就職活動—学生と企業の出会い』,中央公論新社
- 山本奈生・長光太志,2015,「大学生の就職活動と進路決定の経緯:インタビュー調査の社会的分析」,社会学部論集,60,61-75
- 米原拓矢・田中大介,2015,「地元志向と心理的特性との関連—新たな発達モデルの構築に向けて—」,地域学論集,11(3),pp.139-157
- 財団法人九州経済調査協会,1991,『福岡一極集中と九州経済』
- 株式会社ダイヤモンド・ヒューマンリソース,2015,『2016卒採用・就職活動の総括』
- 株式会社ディスコ,2015,『2016年度「新卒採用マーケット」の最終総括』
- 株式会社リクルートキャリア就職みらい研究所,2015,『大学生の地域間移動に関するレポート—大学キャンパス所在地から見る,就職予定先所在地までのパターン—』